

Gregory Vargo,  
*An Underground History of Early  
Victorian Fiction:  
Chartism, Radical Print Culture, and  
the Social Problem Novel*

(Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture)  
Cambridge: Cambridge University Press, 2018. 278pp.  
Hardback £75, ISBN: 978-1-107-19785-5

松浦 愛子

グレゴリー・ヴァーゴによる本書、*An Underground History of Early Victorian Fiction* は、1830年代後半から1850年代にかけて英国で展開されたチャーティスト運動を支えた「120以上の新聞、雑誌」(6)に注目し、労働運動から派生した急進的政治文学と中産階級の社会問題小説の相互交流を考察する。チャーティスト運動当時の社会問題を労働者の視点から描き出した文学は運動の機関紙や雑誌に掲載され、新奇な社会現象となる一方、政府の苛烈な思想統制の弾圧の対象でもある。ヴァーゴは、国家権力と資本主義の両者の迫害と搾取の対象であった労働者階級の急進主義的な印刷文化をつうじて、英国の政治、ジャーナリズムと文学をめぐる歴史の再考察を行い、「正統」と称される知識の生産形態を支えている支配構造を問い直す。

ヴァーゴは帝国主義政策、政治経済と救貧法改正、チャーティスト運動、女性解放運動を含む当時の社会問題を扱うハリエット・マルティノー、エリザベス・ギヤスケル、チャールズ・ディケンズの正典的な社会問題小説が、いかにして過激派労働者の政治的言説により形成されたかの実証を試みる。ただし、中産階級の小説家は当時の過激主義に同情的ではないこともあり、両者の合流点の各々は暫定的かつ部分的であった。一方、中産階級とは別個の伝統とみなされてきた急進主義運動の文学は、実際には社会問題小説、教養小説、メロドラマ等、「主流」の文化を積極的にかかわりつつ、中産階級の小説を脱構築する実験的な文学を形

成した。

従来の文学分析では、個人主義が19世紀の小説を特徴付けた。例えば、教養小説では、主人公の自己実現という前提がある。しかし、主人公の成長、就業や結婚による主体の独立という中産階級の教養小説における自己の成長物語は、チャーティスト小説において、社会から阻害され主体が確立できず、自分の力が及ばない世界で翻弄される主人公の物語に書き換えられる。主人公を含む全ての登場人物が筋の進行のための機能を負わされた脇役であり、社会のシステムの一部に過ぎない。こうした文学上の技法により、チャーティスト小説は主人公を過酷な状況に追い込む当時の不平等な社会システムを批判する。同様の技法により、勸善懲悪が特徴のメロドラマは社会批判のための戦略となる。

以下に、概要を追う。第1部は、貧民救済と救貧法改正、第2部はチャーティスト小説と文化、第3部は市場主義、帝国、社会参加をめぐる国際主義に関するものである。

第1部の第1章は、政府の命を受け、救貧法改正を後押ししたマルティノーの小説『貧者と救貧法』(1833)と救貧法改正の動きを支えるウィリアム・コベットのイデオロギーとの関与を指摘する。コベットは、16世紀のカトリック修道院の解体を現代の私有財産制の由来と説き、カーライルのゴシック建築論や1860年代のセンセーション小説に影響を与えた。この後、マルサスの『人口論』(1798)を振った貧者の赤子の抹殺を煽る怪文書、「マーカス・パンフレット」が取り上げられる。第2章では、短編小説とジャーナリズムを検証し、メロドラマによる自由市場経済批判を考察する。

第2部の第3章は、トマス・クーパーの教養小説による小説の脱構築である。第4章は、中流階級の社会問題小説家への影響に焦点を移し、ギヤスケルの『メアリ・バートン』(1848)における労働者階級による社会意識の先鋭化とその背景として現れる自我の肖像が、教育に関するチャーティスト運動の考えの借用であると主張する。第5章は、アーネスト・ジョーンズの演劇による父権社会への批判を取り上げる。

第3部、第6章は、チャーティスト運動の印刷文化が、植民地論争と何万人もの労働者を対象とした国内の危機をどのようにして同じ分析枠組みに導いたかについて説明する。第7章は、『二都物語』(1859)を例に、ディケンズのチャー

ティスト運動の共和国の国際主義に関する言説の借用を示唆する。

全体を概観した後で、ここではさらに、第4章について詳しくみることにしよう。“Questions from Workers Who Read”は、教育と自己形成におけるチャーティスト運動の思想とギヤスケルの小説『メアリ・バートン』の共通点の考察である。貧富の差を問題視するはずの社会問題小説が、労働者から多くを学んでいたという皮肉めいた現象を最もよくとらえた本書の中心的な章である。

ヴァーゴは、『メアリ・バートン』を教育の点から読み直す。ギヤスケルはジョンを通じて、知識の獲得により労働者が自らの階級のための政治的な抗争に向かう姿を描く。ジョンを過激な政治活動に傾倒させる契機となるのは識字能力である。まず、ジョンは聖書に悪や矛盾や不正を憤ることを学び、次に、チャーティスト運動の機関紙『ノーザン・スター』から、工場法改正など急進派の思想を学んでいく。

教育は、当時の重要な社会問題であった。教育はチャーティスト運動の目標の中心的なものであり、「不幸の最大の原因」は「無知」であり、「知識が幸福の最も有効な手段である」という認識に基づき、チャーティスト新聞は人々を啓蒙した(123)。同時に、ギヤスケルが教育のない労働者をフランケンシュタインの怪物に例えたように、中産階級は教育に強い信頼をおいていたが、教育をめぐるチャーティストとギヤスケルの視座はどのように呼応したのであろうか。以下、ヴァーゴによる『メアリ・バートン』の読み直しを追うこととしたい。

多くの19世紀小説と同じく、『メアリ・バートン』については個としての登場人物のあり方が重要とされてきた。例えば、レイモンド・ウィリアムズは労働者階級の政治闘争からメロドラマへの筋の移行を批判し、チャーティストのジョン・バートンによる資本家の殺人事件を境にした前半と後半の分断を指摘する。しかし、ヴァーゴによれば、作品を通して政治と私的領域は絡み合っている。例えば、ウィリアムズが筋の分岐点とするカーソン殺害事件は、資本家殺害という政治的暗殺であると同時に、父親による娘の誘惑者殺害という勸善懲惡のメロドラマの要素を孕む。また、ウィリアムズの解釈では、移住は個人的な成功物語であるが、ヴァーゴによればチャーティスト運動の政治的テーマを教育面に転じつつ考察したものである。改心した資本家カーソンがみずからの内的覚醒をつうじ改革者となるのに対し、ジェムとメアリは共同体と連携した相互扶助により自活

する。当時のチャーティスト小説において、国外移住は逃避ではなく、見捨てられた母国の絶望的状况が物語を個人レベルの解放に収斂させることの困難さを示した。結末に登場するジョンとエスタの共同墓地は、犠牲者の無言の問題提起である。また、チャーティスト運動は当時、移民を奨励しており、実在したチャーティストと同名のダンクームによるジェムのカナダの農業学校への就職斡旋は、急進主義派の教育理念と人脈による成功を意味する。

ヴァーゴは『メアリ・パートン』に、チャーティスト小説による中産階級の小説の脱構築の痕跡をみる。システム内の超越的な主体の不在をモチーフとするチャーティスト小説と同様、ギヤスケルは小説の序章において、中産階級の語り手による声なき労働者の心の代弁という主張と同時に、境遇に翻弄される労働者という枠付けを行う。『メアリ・パートン』では、通常の小説に稀有なほど、人物の表象が共同体のネットワークに埋め込まれている。登場人物は、食べ物、金銭、身をよせる場所、仕事、新聞、詩、薬、助言など、ありとあらゆる体験、経験、知識を共有する。同時に、批評家グラチアーノによれば、ミハイル・バフチンが小説において主人公の条件として定義する変容の可能性を持つ登場人物は不在である。マンチェスターの社会的状況と同化し、共同体が実存上の決定的なファクターとなっている意味で、主人公とシステムは同化したのである。個を超越した法と経済システムの中で、個人はなすすべもなく翻弄される。チャーティストは殺人犯を主体的な意志によらず、籤という偶然にゆだねる。殺人犯の特定を巡るサスペンスに示されることは、物語の1つの出来事としての暗殺の帰結が比較的わかりやすいメロドラマから推測可能な因果ではなく、個人の思感を超えた推測不可能な偶然に左右されるとともに、共同体の一員として誰かがその責を取らなければならない理不尽さの許容である。システムに囚われたジョンはその身体的な拘束感に苛まれる。メアリの筋の進展はどの程度、この共同体のネットワークに属するか、離れるかによって説明できる。経済システムに翻弄される主体のモチーフは、後半の法のシステムの前に翻弄されるメアリの無力感をつうじて現れる。こうした文学上の技法により、ギヤスケルは当時の不平等な社会システムを批判する。

ヴァーゴは、チャーティスト運動の言説がバフチンのポリフォニーのように小説内に流れ込むことを示しているのだが、それを実際の社会的文脈で実証した点が評価できよう。ギヤスケルは慈善活動とユニテリアン派との親交により、急進

主義的労働者の思想をよく知っていた。さらに、ヴァーゴはエイバル・ヘイウッドの書店を含む、マンチェスター市内の各所でチャーティスト運動の印刷物が販売されていたことを指摘する。ヴァーゴは、チャーティスト運動の一派、「教育チャーティズム」と『メアリ・バートン』の言説の類似を指摘する。特に、ウィリアム・ラヴェットとジョン・コリンズによる小冊子『チャーティズム——人民のための新しい組織』（1840）の民主的学校制度と、マンチェスターで発行された『マクドゥルズ・チャーティスト・アンド・リパブリカン・ジャーナル』（1841-42）の支配階級の文化の枠組みの相対化と労働者の文化への尊厳への訴えが共通する。

ギヤスケルの知人、ジェームズ・ケイ・シャトルワースは、経済学の知識の教授による労働者の従属を説くが、ギヤスケルは、労働者の潜在的な知の力を認める点で他の中産階級と一線を画す。中産階級の語り手と作品内の労働者階級の表象の相克をつうじて、ギヤスケルは中産階級の偏見を暴露し、労働者の知を擁護する。序章において語り手は、カーライルの描写に準じ、無知な労働者の典型を繰り返すが、ジョブ、ジェム、マーガレット、アリス・ウィルソン、ジョン・バートンがそれら固定観念を払拭する。

ヴァーゴは、ギヤスケルの教育に関する思想は多義的であることを認めたうえで、ギヤスケルが、文字を読むことのできる労働者運動の政治的意味を分析しながら、チャーティスト運動の思想の影響のもとに、教育を民主的な権利として主張し、個人的かつ集合的の自己実現のための闘いの道具としてそれを用いたことを賞賛し、労働者階級の知性の可能性を広く人道的に理解していたと結論付ける。

では、本書の上記の結論をどう評価すべきであろうか。

まず、エドワード・P・トムソンの『労働者階級の形成』（1963）以来、地方史に焦点を当ててきた労働者階級のキャンオンを「正当」の中産階級の小説研究に接続するための、本書の大胆な試論の数々を評価したい。ミシェル・フーコーの指摘通り、言説編成体が機能していたとする議論は評価できる。

だが、サバルタンは暗号ではない。それは、実在した、複雑で、歴史的な存在である。本書序章の題“Can a Social Problem Speak?”は、チャーティスト運動をサバルタンと示唆する。革命理論の理想化によって、当事者の思考が抜けおちてしまうのではないか。実際の労働者はどう感じていたのか？ チャーティスト運動は政府の厳しい弾圧を受けたが、もしそれがなければ労働者達は、すんなりと中

産階級に変わりえたのであろうか？

確かに、ギヤスケルの労働者の知への視座はチャーティストのそれとほぼ合致する。ジョブの博識さは、中産階級の伝記にみられる個人的の傑出した資質としてではなく、労働者の知の共同体の中に帰される。作品中では、労働者の知は全人的で、数学、物理学、機械工学、植物学から、音楽、詩、薬草の知識まで幅広く。また、労働者らは機場、家、公会堂など、公教育の場以外で知を獲得する。また、ギヤスケルは、ランカシャー方言に古典文学を用いて脚注を付し、労働者階級の方言に優れた知性が内在することを示唆する。さらに、マーガレットのジョブに対する態度にみられるように、知識の習得は、最上の喜びとして描かれる。また、ギヤスケルは中産階級による知の序列化に疑問を呈する。カーソンは洗練された「文化」を背景に、ジェムと労働者代表を見下す。だが、カーソンがシェイクスピアを誤用する一方、ジェムはバーズを誦んじるように、チャーティストは文学に対する高い教養で中産階級のカーソンを上回っていた。注目すべきは、このように教養を身につけた新たな労働者を評価すべく、語り手は、分別はないが力のある労働者をフランケンシュタインの怪物に例えた点である。これに対し、実在のチャーティストは、同じフランケンシュタインのモチーフをヴォルテールやトマス・ペインの革命理論を独学で読みあさった独学者としての自画像と重ねている (28)。

中産階級の作家が「標準的な」理性の担い手とされ、労働者作家は「地下」の知的抵抗勢力とされる通り、作者の眼差しはあくまで中産階級のそれである。ロンドンの19世紀の騒擾の場を訪れ、かつての貧困法委員会の本部に抵抗の拳を突き上げる本書の作者の自画像 (xii) は、労働者の抵抗的な姿勢への憧憬・賛美を示す。同時に、そのパフォーマンスが、ネイティヴ・インフォーマントのすがたを文学、歴史、文化の実践をつうじて追跡する代わりに、「ある種のポストコロニアル主体が逆にコロニアル主体を再コード化し、ネイティヴ・インフォーマントの立場を占有してしまう」とする『ポストコロニアル理性批判』(1999)のスピヴァックの警鐘を呼び起こさざるを得ないことも事実である。言説の構造変化(この場合は文学)がどのように周辺の主体に変化を及ぼすかについては、さらなる分析が必要となろう。

(釧路公立大学准教授)